

令和 7 年 6 月 4 日現在

機関番号：36101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2024

課題番号：20K02702

研究課題名（和文）児童虐待予防にヤングケアラーを視座に入れた教育・地域連携協働システムの構築

研究課題名（英文）Education and community partnerships and collaborative systems that incorporate the young carers' perspective into child abuse prevention.

研究代表者

辻 京子（TSUJI, KYOKO）

四国大学・看護学部・教授

研究者番号：60611944

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、児童虐待予防にヤングケアラーの視点を取り入れ、学校と地域の連携による支援体制の構築を目指した。養護教諭への調査から、支援の認識や体制の課題、対応の難しさが明らかとなり、健康相談を通じた丁寧な支援実践や当事者を交えた研修の有効性も示された。養護教諭の役割の重要性が浮き彫りとなり、今後の体制強化と専門性向上の必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、ヤングケアラーの視点を児童虐待予防に取り入れ、学校と地域の連携による新たな支援体制の構築を提案した点に学術的意義がある。また、養護教諭の実践を通じて、子どもたちの見えにくい困難を早期に捉え、支援につなげる重要性を示したことは、実践的かつ社会的にも意義深い。ヤングケアラーの理解促進と支援体制強化に資する知見を提供しており、教育・福祉分野の政策形成にも貢献し得る成果である。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to incorporate the young carers' perspective into child abuse prevention and to build a support system through collaboration between schools and the community. A survey of school nurse-teachers revealed their perceptions of support, institutional challenges, difficulties in dealing with the situation, and the effectiveness of careful support practices through health consultations and training with the parties involved. The importance of the role of school nurse teachers was highlighted, suggesting the need to strengthen the system and improve their expertise in the future.

研究分野：子ども福祉

キーワード：児童虐待予防 ヤングケアラー 養護教諭

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ヤングケアラーとは、病気や障がいのある家族の介護や世話を日常的に担っている 18 歳未満の子どもを指す。総務省の調査(2012)では 15～19 歳の実態が示されたが、全国レベルの正確な数値ではなく、14 歳以下の小中学生は含まれていない。ヤングケアラーの背景には、ひとり親家庭や複雑な家族構成、貧困など様々な要因があり、子どもの教育を受ける権利や文化的な生活への参加、生きる権利などが阻害されている。特に学童期は、身体的・精神的な発達や社会性を育む重要な時期であり、その時期に家族のケアに多くの時間を費やすことは、子どもの健やかな成長を妨げる問題となる。学校現場では、不登校や遅刻、長期欠席の背景にネグレクトが存在する場合があります、その一部にヤングケアラーが含まれていることが指摘されている。

しかし、家庭の事情はプライバシーに関わるため踏み込みにくく、十分な支援につながっていない現状がある。また、教育現場や地域社会において、ヤングケアラーの概念自体が十分に浸透しておらず、問題の早期発見や対応が困難となっている。ヤングケアラーの実態を正しく把握し、学校や地域がその存在を理解することは、児童虐待の予防や子どもの権利を守るための重要な一歩となる。ヤングケアラー支援は、すべての子どもが安心して学び、育つ社会を実現するために必要不可欠である。

2. 研究の目的

日本におけるヤングケアラーの研究は、主に 15 歳以上を対象とした文献レビューや在宅介護に関する調査が中心であり、15 歳未満の学童期の実態把握は限定的である。ヤングケアラーは学力や就職、社会性の発達に影響を及ぼし、その背景には「ひとり親」や「貧困」といった児童虐待の要因が含まれている可能性がある。とくに発育発達が著しい学童期において、家族のケアを担うことは子どもの健全な成長を妨げる恐れがある。

本研究では、小学校教諭を対象にヤングケアラーの認識調査を行い、実態を把握する。その結果をもとにヤングケアラーと児童虐待との関連性を明らかにし、学校や地域社会における早期発見と支援のための方策を検討した。

3. 研究の方法

(1) 本研究では、中国四国地域の公立小学校に勤務する養護教諭を対象に、厚生労働省が実施した全国調査と同様の項目を用いて、ヤングケアラーに関するアンケート調査を実施した。調査では、ヤングケアラーに関する認識や学校現場での対応実態を把握することを目的とし、Google フォームを用いて実施した。

(2) 2021 年から 2023 年にかけて、養護教諭への聞き取り調査を実施した。調査では、学校現場におけるヤングケアラーへの気づきや対応経験、支援における課題や工夫、教職員間の連携の実態、地域とのつながりなどについて聞き取った。

特に、ケースメソッドを用いた事例検討会に参加した養護教諭に対しては、検討会での学びや実践への影響についても具体的に尋ねた。

(3) 2022 年から 2023 年にかけて、養護教諭を対象とした事例検討会を開催し、ケースメソッド法を活用してヤングケアラーの発見や支援、校内での対応の課題について検討を重ねた。

(4) ヤングケアラーの実態をより深く理解するため、ヤングケアラーの状態にある子どもの保護者およびきょうだい児ケアラーを対象に、半構造化面接による聞き取り調査を実施した。調査対象者は、養護教諭や関係機関からの協力を得てリクルートし、事前に研究の目的や内容について十分な説明を行ったうえで、書面によるインフォームド・コンセントを取得した。

調査では、家庭内でのケアの実態、ケアに伴う困難や工夫、支援を受けた経験やそのニーズ、学校や地域社会への期待などについて、自由に語ってもらえるよう配慮しながら質問項目を設定した。インタビューは録音し、逐語録を作成したうえで、質的データとして内容分析を行った。

4. 研究成果

(1) ヤングケアラーを意識して対応していると回答した養護教諭は、全体の約 4 割にとどまっていた。また、スクール・ソーシャル・ワーカーやスクール・カウンセラーの配置状況については、「月に数回」または「要請時のみ」の配置が多く、校内における支援体制は十分とは言えない状況であった。

さらに、担任と養護教諭が「気になる児童」として情報共有する際の観察ポイントとしては、「欠席・遅刻」「情緒不安定」「身だしなみの乱れ」「忘れ物の多さ」などが挙げられた。これらの兆候を通じて、ヤングケアラーである可能性が探られていたことが明らかとなった。

しかしながら、子ども自身が家庭内での状況を「当たり前」と捉えていることが多く、本人が困り感を自覚しにくいという点が、学校側の支援につなげるうえでの困難さとして指摘された。

(2)インタビュー調査からは、養護教諭が日常の健康相談の機会を通じて、子どもの生活背景や家庭環境を丁寧に把握し、必要に応じて校内外の支援へとつなげている実践が明らかとなった。また、養護教諭は児童虐待防止の取り組みにおいても中心的な役割を果たしており、児童に関する情報の収集や、子どもの自尊感情を育むための教育的支援、さらには地域や関係機関との連携など、多面的かつ実践的な支援を行っていることが示された。

(3)事例検討を重ねていく中で、養護教諭はヤングケアラーに気づきやすくなる視点を養っていた。特に、ヤングケアラーと児童虐待の違いについて意識しつつも、「違っていても子どもの変化に気づくこと」が支援の第一歩であるという認識が共有された。

また、事例検討を通じて学校内の教員の連携の重要性が再確認され、参加する教職員を増やすことで、多角的な視点から子どもを支える体制が構築できる可能性が示唆された。

さらに、支援を学校内だけで完結させるのではなく、地域の関係機関と日頃から信頼関係を築いておくことの重要性も明らかとなった。

あわせて、保護者の話に丁寧に耳を傾ける姿勢が、子どもと家庭の背景を理解し、適切な支援につなげる上で不可欠であるという視点も得られた。

(4)ヤングケアラーの実態をより深く理解するため、ヤングケアラー状態にある子どもの保護者およびきょうだい児ケアラーを対象に半構造化面接による聞き取り調査を実施した。

調査の結果、対象者は自身がヤングケアラーであることを意識したことはなく、「家族だから当たり前」と捉えている傾向が強かった。また、自分たちの環境が一般の友人とは異なることは認識していたものの、それも「当たり前」と受け止めており、教員や養護教諭に相談しようとは思わなかった。

一方で、同じ境遇の友達がいたため、その友達と情報共有をしていたが、同じ境遇でない者には理解されないと感じ、家庭の状況を積極的に話すことはなかった。

障害のある親を持つ保護者へのインタビューでは、自分の子どもがヤングケアラーの役割を担っているとは気づいておらず、その状況が虐待とみなされる可能性があることに驚きを示した。やはり「家族だから当たり前」という認識が根強いことが明らかとなった。

さらに、社会保障が充実すれば、このようなヤングケアラーの状況は減少すると考えており、社会全体で共生を目指すために、自らの経験や声を発信していきたいという意向も示された。しかしながら、教員に対する期待は低く、学校側への相談や支援を積極的に求める姿勢は見られなかった。

(5)ケアを必要とする人たちとヤングケアラー当事者の思いを共有し、支援の質向上を図るため、養護教諭、児童福祉関係者、学校関係者らを対象としたシンポジウムを開催した。

シンポジウムでは、当事者の声を直接聴く機会が設けられ、ヤングケアラーが抱える日常の困難や支援に対する期待が多角的に議論された。

参加者間で理解と連携の重要性が再認識され、今後の支援体制構築に向けて、学校・福祉・医療が一体となった包括的な連携の必要性が共有された。

また、参加した養護教諭らは、現場での具体的な支援方法や気づきのポイントを学び、自らの実践に生かす意欲を高める成果が得られた。

<引用文献>

厚生労働省、2021、「ヤングケアラーに関する全国調査報告書」

澁谷智子、2017、ヤングケアラーを支える法律：イギリスにおける展開と日本での応用可能性、成蹊大学文学部紀要、521、1-21.

上野加代子、2022、ヤングケアラー概念の批判的検討 英国での議論を参照して、教育文化総合研究所『文化と教育：季刊フォーラム』1、31-38.

上野加代子、2022、『虐待リスク 構築される子育て標準家族』

朝日華子、小澤温、2022、ヤングケアラー支援における高校教員の意識 早期発見・把握に向けた教員の役割に着目して、リハビリテーション連携科学、23(1)、32-40.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 辻京子、西岡かおり	4. 巻 17
2. 論文標題 児童虐待の実践内容から見た養護教諭の役割 小学校に勤務する養護教諭へのインタビュー調査から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本健康相談活動学会誌	6. 最初と最後の頁 15-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 上野加代子	4. 巻 1
2. 論文標題 ヤングケアラー概念の批判的検討－英国での議論を参照して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育文化総合研究所『文化と教育：季刊フォーラム』	6. 最初と最後の頁 31-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻京子、西岡かおり	4. 巻 23
2. 論文標題 小学校に勤務する養護教諭の虐待インタビュー調査から見えるヤングケアラーの存在	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域環境保健福祉研究	6. 最初と最後の頁 37-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 上野加代子
2. 発表標題 「ヤングケアラー言説がつくる「正常な親子」－イギリス自立生活運動からの異議申し立て」
3. 学会等名 医療社会学研究会
4. 発表年 2022年～2023年

1. 発表者名 上野加代子
2. 発表標題 「子どものウェルビーイング ヤングケアラーに焦点を当てて」
3. 学会等名 東京女子大学心理臨床センター（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 辻京子
2. 発表標題 事例記録の振り返りから保健師の視点から見た児童虐待のグレーゾーンの判断要因
3. 学会等名 日本公衆衛生学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 森東美和, 辻京子
2. 発表標題 養護教諭の立場からみたヤングケアラー対応の役割
3. 学会等名 日本学校保健学会第69回学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 辻京子 西岡かおり
2. 発表標題 教材事例を活用した事例検討からみえた養護教諭のヤングケアラーへの気づきの視点と対応
3. 学会等名 日本学校保健学会第69回学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 辻京子
2. 発表標題 インタビュー調査から見た小学校養護教諭のヤングケアラー対応の課題
3. 学会等名 日本養護教諭教育学会第31回学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 辻京子, 滝川つばみ, 西岡かおり, 中岡泰子
2. 発表標題 知的障害がある自閉症のきょうだいをケアした経験がある人たちの語り
3. 学会等名 日本健康相談活動学会第20回学術集会
4. 発表年 2023年～2024年

1. 発表者名 辻京子 西岡かおり 中岡泰子
2. 発表標題 日本におけるヤングケアラー研究に関する文献レビュー
3. 学会等名 日本健康相談活動学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 辻京子 西岡かおり 中岡泰子
2. 発表標題 養護教諭の視点から見た支援が必要と思われる児童への支援体制の現状と課題
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 辻京子 西岡かおり 中岡泰子
2. 発表標題 小学校の養護教諭が捉えるヤングケアラーの実態
3. 学会等名 日本公衆衛生学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 辻京子 西岡かおり 中岡泰子
2. 発表標題 インタビューからみえた小学校養護教諭のヤングケアラー対応への課題
3. 学会等名 日本養護教諭教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 辻京子 西岡かおり 中岡泰子
2. 発表標題 小学校に勤務する養護教諭のヤングケアラーへの関わりと支援の実態
3. 学会等名 日本学校保健学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 辻京子 西岡かおり 中岡泰子
2. 発表標題 ヤングケアラー事例を通じた小学校に勤務する養護教諭の気づきの視点 事例検討会の振り返りから
3. 学会等名 日本健康相談活動学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 辻京子
2. 発表標題 日本におけるヤングケアラーに関する文献レビュー
3. 学会等名 日本健康相談買う同学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 上野加代子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 生活書院	5. 総ページ数 260
3. 書名 『不十分な親』の構築 - ヤングケアラー概念の批判的検討』『児童虐待リスク構築される子育て標準家族』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	上野 加代子 (UENO Kayoko) (50213377)	東京女子大学・現代教養学部・教授 (32652)	
研究分担者	西岡 かおり (NISHIOKA Kaori) (60441581)	四国大学・生活科学部・教授 (36101)	
研究分担者	中岡 泰子 (NAKAOKA Yasuko) (80248319)	四国大学・生活科学部・教授 (36101)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	芳我 ちより (HAGA Chiyori) (30432157)	香川大学・医学部・教授 (16201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関